

I 次の文章を読んで、後の問い(問1～12)に答えよ。(配点 75)

甲

密教を仏教の中では異端見だと、漠然と考えている人がかなりいる。密教では護摩をはじめさまざまな宗教儀礼を行うが、それはインドのバラモン教の儀礼に似ている。また密教寺院に祀られている明王とか天部の諸尊などには、^(注二)多面多臂の像とか、忿怒形のものが多い。それらは一見してヒンドゥー教との密接な関係を思い浮かばせる。また密教経典の中に、呪術的な要素が顕著に認められるのは、^A仏教の本来の姿勢に反するのではないかという疑問がおこつて当然である。

密教を外形から観察すれば、このような見かたも納得できる。また一方、外形のことはひとまずおいて、仏教の基本的な考えかたを民衆の中に、どのように定着させようとしたかという点を中心に、密教が展開した^aコンセキを、歴史的にたどつてみると、^B常識的な視点とはちがった見解も生まれてくる。

初期の仏教経典によれば、釈尊(ゴータマ・ブツダ)は教団の構成員に対して、バラモン教的な呪術や儀礼の行使を禁止したという。それらは比丘たちの悟りにとって意味をもたぬとみなされたからである。しかし比丘や比丘尼たちが、すべてこの禁止のいましめを守りとおしたかどうかについては疑問が残る。仏道を志して仏教教団に加入した者も、入門以前はヒンドゥー(インドで生活する者)としての慣習や行動規範に従つて日常生活をおくつていた。だから悟りをめざす宗教生活では教団の規定を厳格に守る比丘、比丘尼たちといえども、日常生活的なしきたりから完全に脱却するのは不可能であつた。

たとえばインドで森林を歩くとき、いつ蛇や毒虫に襲われなくてもかぎらない。それを防ぐために、人びとは大声で呪文を唱えながら歩き、まえもつて蛇や毒虫を追い払つた。しかしこうした生活技術に類する呪文まで呪術であるとの理由で除去してしまうと、遊行する比丘たちが身の安全を守ることはできなくなってしまう。

初期の仏教教団でも、悟りへの道にとって障害とならない場合にかぎつて、呪術や日常生活上のささやかな儀礼に対する禁令をゆるめ、呪術などの行使を黙認せざるをえなかつた。たてまえとして仏教は、呪術とか儀礼を^ア。しかしながらそのことが、ただちに教団内で呪術とか儀礼が全面的に排除されていたということの意味するわけではないのである。

現在、スリランカとかタイ、ミャンマーなど南方仏教圏では、除災のために唱える呪文をパリッタと呼んでいる。パリッタには、蛇除けとか病気なおしに用いられるものが多い。これらは『律藏』とか『阿含経』など初期仏教経典に説かれているが、それらを素材として、のちに『孔雀経』とか『毘沙門天王経』といった密教経典が成立した。

南伝系のパリッタとともに、北伝系では上座部系統の法藏部の中に、^(注三)経、律、論の三藏以外に、菩薩藏と呪藏がたてられている。菩薩藏とは大乘仏教となんらかの関係をもつものと思われるが、その他に呪藏が別立されているところに注意すべきであろう。

西暦紀元の少し前ころから、仏教の流れの中では、それまでのように出家者中心の教団だけではなく、在家を主体とする信仰集団も生まれてきた。仏教は思想的にも信仰の上でも、この時期に大

きな **I** を迎えたのである。ヒンドゥーとしての通常の在家生活をしている者が、仏教の信者となるのであるから、釈尊の教えも次第に変質をよぎなくされ、形を変えていくのも当然のことであった。

乙

大乘仏教の成立とほぼ時を同じくして、西北インドのガンダーラ地方とか、ガンジス河上流のマトウラー地方で、仏像が刻まれることになった。その結果、仏像を前にして、香や花を献じたり、瞑想を行うという宗教儀礼が紀元後二世紀ころには始められている。

大乘仏教ではかなり早い時期から、懺悔、随喜、勧請といったごく簡単な儀礼も行われていたらしい。それらはまた、次第に仏教独自の儀礼となつて形を整えることになる。仏教は最初期のガンジス河中流域の都市部から、次第に西北インドをはじめデカン高原の南あたりまで教線を拡大していく。このように仏教が農村部までひろがっていたことは、四世紀におこり、バラモン教の復興に力を貸した Gupta 王朝の治政の姿勢ともあいまって、仏教の中にバラモン教の儀礼が積極的に取り入れられる要因となつた。

また一方、民衆が生活のなかで信仰していたヒンドゥー教の神がみもまた、仏教のパンテオンにセツシュユされ、仏教の菩薩や明王となり、仏教は民衆の間に **イ** を作りあげた。ナーガ（竜）とか孔雀といった非アーリヤ系列の神がみを駆使して行う請止雨の儀礼が、密教経典の中にあられたのも、このころのことである。古代インドでは、病氣、貧困、不作、天災、不時の死などの災難は、精霊や鬼神のしわざであると信じられていた。バラモン教の最古の聖典であるヴェーダにも、攘災の呪文が数多く記されている。

初期の密教経典の中には、精霊や鬼神を駆逐したり、慰撫したのち仏教守護の神に変身させる攘災の呪文や儀礼が頻出する。わが身にふりかかる災害を払い、日常生活の安泰を得るためには、仏教教団も信徒も、バラモン教であれ、民間信仰であれ、異教徒がもつ呪法や儀礼を積極的に採用し、それらを次第に仏教の呪法や儀礼に代えていったのである。

純密経典の誕生

通常の大乗仏教経典は、仏教の教理に関する記述がそのほとんどを占めている。それに対し密教経典には、攘災の呪術とかコウトウ無稽な神話や奇蹟談が満ちていると、従来一般に考えられていた。ところが仏教の研究が進むにつれて、仏教もまた多かれ少なかれ、宗教儀礼、呪術、神話、奇蹟談などとまったく関係をもたずにはなりたちえないことが、次第に判明してきた。仏教は聖、密教は俗と一方的にわりきつて考える常識が、そもそも **II** な思考法だといえるであろう。

大乘仏教経典の中でも、『般若経』とか『法華経』には、経典を受持し、書写し、読誦し、チヨウモンすることによって、さまざまな災難より逃れる功德が書きつらねられている。また『阿彌陀経』などに現れているシヨウドの幻想的で神話的な描写とか、また『華嚴経』が描くキフクに富んだ善財童子の求道の物語と、スケールの大きい宇宙観、また仏伝文学に出てくるさまざまな奇蹟談、こういった面については従来あまり注目されなかった。しかしこれらのことは、民衆を仏教にひきつけるためには、**ウ** であつたことを忘れてはならない。

密教が大乗仏教とはまったく別個に、独自の教団を組織していた証拠はみあたらない。中観と唯識といった精緻な理論体系を構築し、哲学的なシサクを行っていた大乗の学匠たちも、行的な面では密教の修法に励んでいたのではないかと思われる。それについて直接表現した記述はまだ見つかっていないが、大乗仏教が繁栄した地方で、発掘された僧院の構造とか、仏像などからみて、そのように考えてもそれほどおかしくはない。

六世紀ころまでに成立した密教経典は、ほとんど呪法の経典といってよい内容をもつ。日本ではそれを雑密経典と呼びならわしている。それに対して、純密経典といわれるのが、『大日経』と『金剛頂経』で、両経はほぼ七世紀には、ある程度の形を整えていたというのが今日までの定説である。

『大日経』と『金剛頂経』の両経典は、インドの中期密教を代表する経典であるが、前期の密教経典と比べて著しい特色をもっている。すなわち前期の密教経典は、一応仏説という形式をとってはいるが、内容の上では現世利益を主体として説く。ところが中期の密教経典では、唯識、中観、如来蔵といった大乗仏教の特色ある思想をその根底に据えて、成仏を目ざす経典であることを、経題の中にも明確に打ち出している。大乗仏教の思想と、密教の観法(注四)を融合させようとした意図を、その中に明瞭に読みとることができる。

また両経には、胎蔵曼荼羅と金剛界曼荼羅を描く方法が記述されており、仏教思想を象徴的に表現する試みもなされている。『大日経』とか『金剛頂経』にいたって、密教は 工 ということができるであろう。

(松長 有慶「密教」)

(注一) 護摩：供物を火に投げ入れる祈願法

(注二) 多面多臂：多くの顔や手を持つ姿

(注三) 蔵：仏典の分類であり、三蔵は仏典の総称

(注四) 観法：特定の対象を思念して悟りにいたる実践的修行ないし儀礼

※ 問題作成にあたり、本文を一部改変した。

問1 傍線部 a ～ g のカタカナを漢字に直せ。解答は解答用紙の所定欄に読みやすいはつぎりした楷書体で書くこと。解答番号は ～ 。

- a コンセキ
- b セツシユ
- c コウトウ
- d チョウモン
- e ジョウド
- f キフク
- g シサク

問2 空欄 ・ に入る語として最も適当なものを、次の①～⑦のうちからそれぞれ一つ選べ。解答番号は ・ 。

- ① 倦怠期 ② 終末期 ③ 黎明期 ④ 混乱期
 ⑤ 繁忙期 ⑥ 転換期 ⑦ 衰退期

- ① 合理的 ② 科学的 ③ 包括的 ④ 特権的
 ⑤ 具体的 ⑥ 抽象的 ⑦ 短絡的

問3 空欄 に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 。

- ① 肯定した
- ② 受容した
- ③ 否認した
- ④ 非難しなかった
- ⑤ 批判しなかった
- ⑥ 忌避しなかった

問 4 空欄 に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 。

- ① 悲愴感^{ひそう}をいだきやすい雰囲気
- ② 威圧感をあたえやすい雰囲気
- ③ 高揚感をおぼえやすい雰囲気
- ④ 解放感をもとめやすい雰囲気
- ⑤ 緊張感をたもちやすい雰囲気
- ⑥ 親近感をもたれやすい雰囲気

問 5 空欄 に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 。

- ① 誇大な奇蹟談
- ② 誤った思考法
- ③ 非常識な描写
- ④ 不可欠な要素
- ⑤ 不適切な記述
- ⑥ 非合理的な経典

問 6 空欄 に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 。

- ① 前期の特色を強化し、現世利益の効用のみを旨とす呪術経典として鮮やかに変身した
- ② 民衆を仏教にひきつけるため、災難回避に専心する呪術経典として緩やかに成長した
- ③ 二つの曼荼羅で象徴されるように、合理性を否定した仏教経典として著しく発展した
- ④ 単なる呪法経典の域を越えて、大乘仏教の一翼を担う仏教経典として新しく誕生した
- ⑤ 大乘仏教とはまったく個別に、奇蹟談を中心に純密経典としての内容を描いていった
- ⑥ 唯識や中観といった呪術を重視する立場から、純密経典としての形式を整えていった

問7 傍線部A「仏教の本来の姿勢に反するのではないかという疑問がおこって当然である」の理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は **14**。

- ① 仏教の基本的な考え方を民衆の中にどう定着させようとしたかは、歴史的な問題だから。
- ② 比丘たちの悟りにとって意味をもたぬ呪術や儀礼の行使は、禁止されていたから。
- ③ 仏教教団に加入した者も入門以前は、ヒンドゥーとして日常生活をおくっていたから。
- ④ インドで森林を歩くとき呪文を唱えるのは、身の安全を守るために必要だったから。
- ⑤ スリランカなどの南方仏教圏で唱える呪文は、初期仏教経典に説かれているから。
- ⑥ 北伝系の上座部系統の法蔵部では、三蔵以外に菩薩蔵が別立されていたから。

問8 傍線部B「常識的な視点とはちがった見解も生まれてくる」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は **15**。

- ① 密教は仏教の中では異端見であるということが明確になること。
- ② 密教の護摩をはじめとするさまざまな儀礼はバラモン教の儀礼とは全く異なること。
- ③ 密教寺院に祀られている諸尊はヒンドゥー教とは無関係であること。
- ④ 密教経典の中に呪術的な要素が顕著に認められるというのは誤解であること。
- ⑤ 密教を外形から観察してもこのような見かたには納得できないこと。
- ⑥ 密教は仏教の基本的な考え方を受け継ぐものであること。

問9 傍線部C「異教徒がもつ呪法や儀礼を積極的に採用し、それらを次第に仏教の呪法や儀礼に代えていったのである」の理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は **16**。

- ① 大乘仏教の成立頃に仏像が生まれ、仏像を前にして行う宗教儀礼が始められたから。
- ② 懺悔、随喜、勧請などの簡単な儀礼が次第に仏教独自の儀礼となって形を整えたから。
- ③ グプタ王朝の治政もあずかつて、バラモン教の儀礼が積極的に取り入れられたから。
- ④ 民衆が信仰していたヒンドゥー教の神がみが、仏教の菩薩や明王となったから。
- ⑤ 非アーリヤ系統の神がみを駆使して行う請止雨の儀礼が、密教経典の中にあらわれたから。
- ⑥ 精霊や鬼神がもたらす災害を払い、日常生活の安泰を得ることが必要だったから。

問10 空欄 **甲** に入る小見出しとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は **17** 。

- ① 密教の異端性の背景
- ② 初期仏教と呪術
- ③ 仏教教団の慣習と行動規範
- ④ 生活技術としての呪文
- ⑤ 遊行する比丘の安全と呪術
- ⑥ 在家信者と仏教の変質

問11 空欄 **乙** に入る小見出しとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は **18** 。

- ① 宗教儀礼の本源
- ② 教線拡大と信仰の本格化
- ③ 仏教の中のバラモン教
- ④ ヒンドゥー教と非アーリヤ系列の神がみ
- ⑤ 経典の中の精霊と鬼神
- ⑥ 呪法と儀礼の採用

問12 本文の内容に合致するものを、次の①～⑨のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は

19

 ・

20

 。

- ① 呪術や日常生活上のささやかな儀礼に対する禁令が仏教教団内でゆるめられたのは、呪術などの行使が悟りへの道にとって有益であり、さらに森林を遊行する比丘たちを蛇や毒虫から守るうえで実質的に有効であったということによる。
- ② 懺悔、随喜、勧請といったごく簡単な儀礼は大乗仏教ではかなり早い時期から行われており、仏教の教線拡大がバラモン教の復興の原因になると、グプタ王朝の治政と結びついて、仏教の中にバラモン教の儀礼が積極的に取り入れられる要因となった。
- ③ 密教の儀礼や諸尊などにバラモン教やヒンドゥー教との密接な関係を否定する要素が顕著に認められるとする見かたは、密教は仏教の本来の姿勢に反するのではないかという疑問につながり、同時に密教に対する常識的な視点とは異なった見解をも生むことになる。
- ④ 大乗仏教の経典が仏教の教理を中心に記述しているのに対して、密教の経典は呪術や神話などの奇蹟談で満ちていると従来一般に考えられていたが、仏教研究の進展によって、大乗仏教の経典は奇蹟談と無関係に成立したことが判明した。
- ⑤ バラモン教的な呪術や儀礼の行使は比丘たちの悟りにとって意味をもたぬとみなされたため禁止されたが、仏教教団に加入した比丘たちはヒンドゥーとしての慣習や行動規範を変えらることなく日常生活をおくっていたことを初期の仏教経典は伝えている。
- ⑥ バラモン教の最古の聖典であるヴェーダに攘災の呪文が数多く記されているのは、病気や貧困などの災難は精霊や鬼神のしわざであると信じられていたからであり、その信仰は初期の密教経典に影響を与え、仏教教団の信徒もそれらを呪法や儀礼として整えていった。
- ⑦ 南方仏教圏のパリッタは除災のための呪文であり、『律蔵』や『阿含経』などの初期仏教経典に説かれるが、北伝系でも上座部系統の中に呪蔵が別立されているのは、大乗仏教となんらかの関係をもつと考えられるので注意が必要である。
- ⑧ インドの前期密教の経典は、仏説といいつつ実は現世利益を主体としているが、中期密教を代表する『大日経』と『金剛頂経』の両経典は、曼荼羅という象徴的な表現を用いながら成仏を目指しており、大乗仏教の思想的な流れのなかにあることを示している。
- ⑨ 密教が大乗仏教とまったく別個に、独自の教団を組織していた証拠がみあたらないのは、大乗仏教が繁栄した地方から発掘された僧院の構造などからみて、中観や唯識などの精緻な理論体系を構築した大乗の学匠たちが密教の修法に励んでいたと推測されるからである。

Ⅱ 次の文章を読んで、後の問い（問1～11）に答えよ。（配点 75）

科学的な仮説や科学理論と呼ばれる資格をもつには、何らかの方法でその仮説や理論が経験的にテストされる必要があります。得られたデータや観察に対して、ある仮説や理論はどれくらいうまくそれを説明できるのか、あるいは説明できないのかを比較検討することで、私たちはある仮説が他の仮説よりもすぐれているとかおとつているという判断を下すことができます。裏返せば、そのような経験的テストをすることができない主張は、データに照らした相互比較ができないという意味で、科学的ではないと言わざるを得ないわけです。

「経験に照らす」ということは、科学的であるために避けては通れない洗礼です。自然現象に関する仮説は自然界から得られるデータによりテストされる。まったく同様に、科学に関する言説は実際の科学に関する知見によつてテストされる——私の立場は、独り善がりな擁護を排して、ある主張の妥当性を誰もが評価できるよりどころは経験的データしかないだろうという立場です。

もちろん、実験科学のように、仮説をテストするための観察データが比較的得やすい場合もあるでしょう。他方で、過去の歴史に関する知見は相対的に得にくいでしょうし、不確かさやまちがう危険性も少なくないでしょう。また、現実の科学そのものに関する情報（たとえば科学者コミュニティの動向や背後関係）を得るときには、やはりさまざまな困難があると思います。しかし、それは程度のちがいにすぎません。重要なことは、私たちにデータの洗礼を受ける覚悟があるかどうかということだけです。

ダーウインはどんな本を読んでいたか

チャールズ・ダーウインは、五年間に及ぶビーグル号航海（一八三二～三六年）のトシヨウ^a、ガラパゴス諸島をはじめ中南米の各地に立ち寄り、かの地の自然と生物について多くの知見と刺激を得て、彼の生涯にとつて最初で最後の海外旅行を終えました。イギリスに帰国したダーウインは、はじめロンドンに居を構え、後に郊外のタウンに永住することになります。

ちよつどこの頃から、ダーウインは「読書ノート（Reading Notebooks）」をつけはじめます。最初は単純に「読んだ本」と「読むべき本」のタイトルと短評を記すだけでした。しかし、その後どんどん冊数が増え、生物学ジャンルとその他（小説・伝記・紀行を含む）のジャンルに分けるようになり、結局一八三八年四月の開始から一八六〇年にいたるまで、二十年以上にわたつて書き綴られました。几帳面に付けられたこの読書ノートは、それだけでゆうに一冊の本にヒツテキする分量^bがあります。

キンペンなダーウインは、二十年後の『種の起源』（一八五九年）としてケツジツするまでに、当時としては最新の生物学・地質学・育種学などの知識を本から得ようとしていたことが、その読書ノートからうかがえます。

しかし、その一方で、彼は生物以外の読書も怠ることはありませんでした。チャールズ・ラムの『エリア随筆』やシャロット・ブロンテの『ジエーン・エア』など、エッセイや小説や数々の個人伝記を読んでいたダーウインでしたが、冊数の割合からいってもつとも大きな部分を占めていたのは、はかならない歴史書と自然哲学書でした。ツェキユジテスら古典歴史家の作品はもとより、

エドワード・ギボンズの大部な『ローマ史』やその他ヨーロッパの歴史を叙述した本のタイトルが、「読んだ本」リストに名を連ねています。生物の歴史に関心をもつダーウインは、当然のこととして歴史学にも関心を払っていたということでしょう。

甲

ダーウイン進化学に関する生物学史研究によると、さまざまな意味でシヨウゲキ的な登場をした『種の起源』は、生物進化に関わる叙述すなわち物語 (narrative) だったと指摘されています。ここでいう「物語」とは、歴史上のできごとをその因果順に時間軸に沿って並べた記述を指していて、物語それ自体がひとつの説明であるとみなされます (ロバート・リチャーズ)。「物語」という日本語のもつ語感は、無意識のうちに現実とは何の関係もない「おとぎ話」を I させてしまいます。しかし、ここで私が用いている「物語」は、過去のできごとを説明するひとつのスタイルであると解釈してください。

物語が説明であると言う以上、それは現実のデータによつてその妥当性がチェックされる必要があります。たとえ直接的に観察できないような現象であつても、適切な方法でテストすることさえできれば、その時点での最良の説明 (仮説、理論) を選択できる可能性があります。

最良の説明が必ずしも真実であるとはかぎりません。私たちがデータから推論しようとしている物語は、「真」なるものあるいは「偽」なるものではないのです。未来を見通す予言者のふりをする必要はありません。手元にあるデータからどこまで妥当な結論 (すなわち物語) を引き出せるのか、あるいは引き出せないのかを見極めることができれば、それで十分でしょう。

私たちの想像力はとても豊かです。地震・噴火・彗星・干魃などの自然現象に対して、私たちの祖先がどれほどさまざまな説明をしてきたか——民話や神話として世界各地に残されている「物語」もまた、自然の脅威を目撃した先祖たちによる説明だと言えます。人間界あるいは自然界の現象を、民俗的なローカル世界観の中へと位置づけることは、「物語」としていつたん II されることによつてはじめて可能になったのでしょう。

科学者もまた、数多くの仮説を提出することにより現象を説明しようとしています。物語というスタイルの説明 (物語的説明) が、どのような心理によつて産み出されるのかは定かではありません。それは観察を繰り返すことで認知的帰納が作用した結果かもしれないし、ひょつとしたら「天啓」から得た悟りかもしれません。

しかし、説明の出所はどうでもいいのです。説明や仮説を導いた過程それ自体は、その説明が他の対立する説明と比較したときにどれくらいすぐれているかは、何の関係もありません。その判定をするのは、仮説の出自や心情的なアピールではなく、ア と背景知識だけです。

乙

しかし、まさにこの点が近年の歴史学では論争の火種となりました。歴史もまた、他の仮説や理論と同様に、経験的テストのヒヨウテキであるとみなす立場に対しては、近年の相対主義的懐疑論に立つ歴史学派から強い反論が提出されています。

とくに、その筆頭である歴史学者ヘイドン・ホワイトは、「現実の出来事が語る、自ら語るなどということは起きえよう筈がないのである。現実の出来事は、黙って存在さえしていればそれで足りるのだ」として、**イ** データとしての資料による縛りから切り離そうとします。そして、レトリックとしての歴史の価値を擁護して、「もし、語りと物語性とを、架空の事柄と現実の事柄とを一つの叙述の中で出会わせ、結びつけ、あるいは溶けあわせる手段であると考ええるならば、物語の魅力と、物語を拒絶する根拠とを同時に理解できるだろう」と言います。

ヘイドン・ホワイト流の相対主義の立場から言えば、歴史という「物語」を編み上げることは歴史学者のスタンスによってどのようにでも描けることになります。このとき、歴史「物語」にとってもっとも重要なことは、史実（データ）との突き合わせではなく、どのように相手（歴史の読者）をうまく説得できるかというレトリックの巧拙だけになってしまいます。

一方、ヘイドン・ホワイトに対して正反対の立場をとるギンズブルグは、「今日、歴史叙述には（どんな歴史叙述にも程度の差こそあれ）物語的な次元が含まれているということが強調されるとき、そこには、フィクションとヒストリー、空想的な物語と真実を語っているのだと称している物語とのいつさいの区別を、事実上廃止してしまおうとする相対主義的な態度がともなっている」と正当な反論をしています。ギンズブルグは、歴史学において相対主義的な姿勢をとり続けるかぎり、資料として得られるデータにテキゴウするしないとはまったく無関係に、どのような「物語」でも書いてしまうのではないかと指摘します。

少なくとも、**ウ** としての歴史「物語」をターゲットとするかぎり、「物語」は確かに経験的テストの対象であると私は考えています。さらに言えば、あるデータを説明する対立仮説があまりに多過ぎるため、データによってどんどん絞り込んでいかないと何も説明できないということにもなりかねません。より正確には、データによってテストできるような歴史「物語」をつくっていきこうという意思表示です。

生物や言語、写本の系統学は、厳密にデータに基づく歴史「物語」を復元する方法論をそれぞれ別個につくってきました。現在の私たちが手にできる情報源に基づいて、過去に関する推論すなわち「エンテュメーマ」あるいは「アブダクション」を実践することは、学問分野を越えて見渡せば、可能性も将来性もあると考えられるでしょう。

（三中 信宏「系統樹思考の世界」）

※ 問題作成にあたり、本文を一部改変した。

問 1 傍線部 a ～ g のカタカナを漢字に直せ。解答は解答用紙の所定欄に読みやすいはつぎりした楷書体で書くこと。解答番号は ～ 。

a トシヨウ

b ヒツテキ

c キンベン

d ケツジツ

e ショウゲキ

f ヒョウテキ

g テキゴウ

問 2 空欄 ・ に入る語として最も適当なものを、次の①～⑦のうちからそれぞれ一つ選べ。解答番号は ・ 。

① 連想 ② 実現 ③ 登場 ④ 再現
⑤ 復元 ⑥ 妄想 ⑦ 完結

① 想像 ② 強調 ③ 消化 ④ 翻訳
⑤ 創造 ⑥ 観察 ⑦ 実演

問 3 空欄 に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 。

- ① 現象世界に残されている物語
- ② 想像力豊かな私たち
- ③ 認知的帰納が作用した結果
- ④ ‘天啓’から得た悟り
- ⑤ 現実とは無関係の「おとぎ話」
- ⑥ 現象世界から得られるデータ

問 4 空欄 に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 。

- ① 仮説としての歴史
- ② 史実としての歴史
- ③ 物語としての歴史
- ④ 空想としての歴史
- ⑤ 真実としての歴史
- ⑥ 経験としての歴史

問 5 空欄 に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 。

- ① 巧みなレトリック
- ② 真偽が明確な物語
- ③ 空想的な物語
- ④ できごとの系列
- ⑤ 心情的なアピール
- ⑥ 数多くの仮説

問 6 傍線部 A 「生物以外の読書も怠ることはありませんでした」に該当するものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 。

- ① 生物進化に関わる物語を記すには最良の説明が可能となる現実のデータが必要であり、先行研究の精読に努めた。
- ② 生物進化に関わる物語を記すためには知見と刺激を得る必要があり、海外旅行の際には多くの著作物を求めていた。
- ③ 生物進化に関わる物語を記すためには想像力が必要であり、エッセイや小説や数々の個人伝記を熟読していた。
- ④ 生物進化に関わる物語を記すためには常識として歴史上のできごとを理解する必要があり、空想的な物語からも知識を得ていた。
- ⑤ 生物進化に関わる物語を記す際に史実を時間軸に沿って並べる叙述方法を採用するため、歴史書にも関心があった。
- ⑥ 生物進化に関わる物語を記すためには未来を予測する能力も必要であり、その根拠となるデータを増やそうとした。

問7 傍線部B「説明の出所はいつでもいいのです」の説明として最も適当なものを、次の①～

⑥のうちから一つ選べ。解答番号は

34

。

- ① 科学にとって重要なのは、仮説の出自や心情的なアピールではなく、説明や仮説を導いた過程がどれくらいすぐれているかということ。
- ② 科学にとって重要なのは、説明や仮説を導いた過程そのものではなく、データから物語を引き出していくということ。
- ③ 科学にとって重要なのは、説明や仮説を導いた過程そのものではなく、現象の説明がどのような心理によってもたらされたかということ。
- ④ 科学にとって重要なのは、データによる検証がなされ、最良の説明を引き出すことができるとということ。
- ⑤ 科学にとって重要なのは、現象世界から得られるデータによる判定ではなく、どれだけ多くの仮説を提出できるかということ。
- ⑥ 科学にとって重要なのは、どれだけ多くの仮説を提出できるかということではなく、現象世界のデータからどのようにして結論を導くかということ。

問8 傍線部C「近年の相対主義的懐疑論に立つ歴史学派」の姿勢として最も適当なものを、次の

①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は

35

。

- ① 現実の出来事は黙って存在さえしていればそれで足りるのだという考え方は、データとしての資料に基づいて客観的に歴史を説明することにはかならないということ。
- ② 架空の事柄と現実の事柄とを一つの叙述の中で融合させる手段として、語りと物語性とを用いることは、経験的テストの対象である歴史の価値を擁護することになるということ。
- ③ 歴史という物語を編み上げることは、史実（データ）との突き合わせではなく、歴史の読者を納得させるために用いるレトリックの巧拙に疑問を抱くということ。
- ④ 歴史叙述には物語的な次元が含まれているということを強調し、そこにフィクションとストーリーとの区別を事実上廃止してしまおうとすること。
- ⑤ 資料として得られるデータによってテストされるかどうかとはまったく無関係に、どのような物語でも歴史学者のスタンスによって自由に描くべきであるということ。
- ⑥ 歴史の物語は経験的テストの対象であり、あるデータを説明する対立仮説が多すぎる場合には、データによって絞り込む必要があるということ。

問 9 空欄 **甲** に入る小見出しとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は **36**。

- ① 「物語」としての説明
- ② 「物語」としての創作
- ③ 「物語」としての民話
- ④ 「物語」が見通す未来
- ⑤ 「物語」から得る悟り
- ⑥ 「物語」は歴史の創生

問 10 空欄 **乙** に入る小見出しとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は **37**。

- ① 歴史は誰がターゲット？
- ② 歴史はレトリックにすぎない？
- ③ 歴史はフィクションにすぎない？
- ④ 歴史は可能性に満ちている
- ⑤ 歴史は論争を繰り返す
- ⑥ 歴史はデータと決別する

問11 本文の内容に合致するものを、次の①～⑨のうちから一つ選べ。解答番号は

38

。

- ① 歴史叙述は実験科学とは異なり、過去の歴史に関するデータが得にくいため、ある程度の物語的創作を行ったとしても科学的だと認められる。
- ② ダーウインは『種の起源』を刺激に満ちた冒険談にするため、最新の生物学や育種学の本だけでなく小説や伝記を積極的に読んでいた。
- ③ ダーウインは『種の起源』を叙述するにあたり、歴史学者と同じように現実とは無関係なデータを時間軸に沿って記す手法を用いた。
- ④ 主張はどのようなものであれ、理論や仮説はデータによる検証を受けて初めて科学としての資格を有することになる。
- ⑤ 相対主義的な立場をとる歴史学者は、民話として創作された物語が史実として解釈されてしまうことを危惧している。
- ⑥ 科学者が数多くの仮説を挙げて現象を説明する場合、結論としての妥当性だけではなく仮説を導き出した過程の方がむしろ重要な意味を持つことになる。
- ⑦ 仮説検証においてデータが価値を持つかどうかは、そのデータによって空想に満ちた物語を引き出せるか否かにかかっている。
- ⑧ 相対主義的な立場をとる近年の歴史学派は、空想と真実との区別を重要視しない態度に反論し、一部論者との間で論争を引き起こしている。
- ⑨ 歴史学における相対主義的懐疑論の立場では、データと突き合わせることを重視しつつ、説得的な物語をつくることが目標とされている。